
短編集

雨と傘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N1424BA

【作者名】

雨と傘

【あらすじ】

短編はここに増やしていく事にしました。ジャンルは多種多様です。勢いとノリで書いた話がほとんど。

女の子パワー

家に帰ると、友人と食事に行っていた同居人が疲れ切った表情で横になっていた。一人暮らしを始めた時に買った、少しくたびれているソファに力なく寝ている姿は、陸に打ち上げられたクラゲを連想させる。

湯を沸かし、熱々の緑茶を2つ入れて疲弊している同居人に手渡す。ズズツと音を立ててすすれば、冷え切った体に暖かさが染みわたっていく。安物だが柄が気に入っている湯呑みを両手で包めば、じんわりと暖かい。

「何事？今日は仲のいい友達と食事に行ったんじゃないっけ？」
「うーん…」

はあ、となんと重い溜息をつきお茶を一気飲みした。猫舌の私には出来ない芸当だ。

「楽しかったよ。初めて行った店んだけど美味しかったし、今度一緒に行こうな」

「それじゃあ、なんでそんなに疲れてるの」

「それがなあ…ちょうど隣のテーブルに女の子が座ってたんだよ、ふたり。たぶんOLなんだろうな。」

「…で？」

少し低くなつた私の声色に、慌てたように弁解する。

「違うんだよ。あの子たちがどうのつていうんじゃないよ、なんて言うか…話してた内容がなあ。凄かったんだよ」

凄いと、どういう事だったのだろうかと少し興味湧いた。

「へー、どんな話だったの？」

「上司の話とか、同僚の話とか、彼氏の話とか…まあ、愚痴だったんだけど。なんていうか」

言葉を探すように目が空を彷徨う。

「多少どころか多量に毒っていうか、毒舌だったんだよ。それに疲

れちゃって」

「へー」

「ガールズトークってどういうの？あれって結構明け透けだよな。たまに顔が赤くなりそうな話も平気でしてるし、女の子って凄いなあって思ったよ。」

「女なんてそんなもんよ。そういう話でストレス発散したり共感してスッキリするのよ。カラオケと同じ。男が趣味に没頭するのと同じよ」

だから男が女に抱いているイメージはほとんど幻想だ、という言葉は飲み込んでおく。女は男に100%…完璧を求めるが、それも実現不可能だ、という言葉も心の中に留めておいた。言っても仕方がない事だし、私も少なからず完璧を求めているからだ。

「そうかなあ？」

「そうなの！」

語尾を強めて言い返せば、そっかあ、と少し気の弱い同居人は、空になったコップを持ってふにやりと笑った。

女の子パワー（後書き）

たまたま入った店で、隣のテーブルにいた女の子達のガールズトークがすげーと思って書いた。で、その女の子達が帰った後、別の席にいた男が「滅多な事言えねえよなあ…」としみじみ言っていた。

ニャンコは見た！

どーもこんにちは。猫です。

言っときますけど、正真正銘の猫です。名前が猫とかいうオチではありません。ネコ目ネコ亜目ネコ科ネコ亜科ネコ属に分類される小型哺乳類のその辺にいる猫です。高い所が好きな極々普通の猫です。魚より肉が好きなのは秘密です。イメージが壊れますから。あ、一番好きなのはマタタビですので、その辺よろしく。

最近、私の中でちょっとしたブームが到来してます。

いつも私が散歩している大学で見つけたんですけどね、これが面白いのなんの。

「ねえ、田中くん。今日、一緒に帰らない？」

「あ、もちろ」

「ちよとお、雅はこれから私とデートなのお。邪魔しないでくれるう？」

一人の冴えない男に美人が2人。派手系と清楚系ですね。いやー、目の保養だねえ。

「え…あ、そうなんだ。ごめんね？」

「分かったんならさっさと消えてよ。雅くん、早く行こお？」

「あ…っん」

田中君は派手系の女に半場引きずられるように連れて行かれる。

名残惜しそうに後ろを何度も振り返るが、派手系の女の腕を振り払う気はないようだ。

あの二人は玄関から出てくるだろうから、先回りして待ち伏せする。

…ビンゴ。腕を組みながら幸せそうな顔で出てきた。とは言うても、幸せそうなのは女の方だけだけど。

気付かれないように後を追う。少し離れていても猫の聴覚と視力なら問題無し。

「…なんで、俺に付き纏うんだ」

田中君が重い口を開く。

「遊びならやめてくれ。俺は…」

「あの子が好きなんですよ。あの子もあなたが好き。」

…人の話を遮るのが好きだな、派手子ちゃんハテコ。あ、派手子ちゃん
はあの女のニックネームね。今決めた。

「知ってるよお。あなたの事はゼーっんぶ」

わあ、笑顔なのにとっても怖い。不気味だね。

「私ね、雅くんの事だーいすきな。大好き愛してるじゃ足りないぐらい愛してる。愛してるを何千万言ったとしても足りない。あなたのためなら私何でもするよ。雅くんを手に入れるためなら何でもする。」

そしてゆっくりと耳元で囁いた。

「ぜつたい、にがさない」

田中君は顔面蒼白。いやー、面白いわ。

そのまま田中君はやっぱり引き摺られるように歩いていく。あはは、このままラブホテル直行？

…んむ？

私の鋭い聴覚と、野性の感が何かを察知した。あれ、清楚ちゃんじゃないか。

清楚ちゃんは物陰に隠れて2人の姿を見つめている。そして携帯電話を取り出して、どこかに連絡を取り始めた。

「…ちよつと、やってほしい事があるんだけど。…ええ、謝礼はたつぷり払うわ。あなた達もいい思いを出来るわよ。」

へへえ？

どうやら清楚ちゃんはただの気の弱い女ではなかったようだ。

うむ、やっぱり面白い。どうなるんだろうなー、あの3人。

大学の敷地をゆるりと歩く。

いままで幾人もの人間を観察してきたけど、今回は長く楽しめそうだ。

ふわりと大好きな匂いがした。

「なう（やつほー）」

「…あれ、ユキちゃん。また来てたの？」

私の大好きで大嫌いな飼い主だ。

「もう、どうやって入ってくるのよ？」

「なう（壁に穴があいてるんだよね）」

「…ま、いいけどさ。今日はマグロが安かったから海鮮丼です」

「にゃう（魚より肉が好きです。活きが良いったら更にグッド）」

マグロはとても美味しかった。

ニヤンロは見た！（後書き）

書きたくなって勢いだけで書いた。なんかこころ猫目線からの小説を書いてみたい。やらないけど。

昏ドラのドロドロ感を出すのは難しい。私が書くとヤンデレとかに近い感じになってるような。

ある勇者の軌跡

少年リユーイはクレマチスは孤独な少年だった。

生まれ故郷は魔物に襲われ消えた。辛くも生き残ったリユーイの母はリユーイを養うために働いて働いて…死んだ。リユーイは母がメイドとして働いていた家に好意で引き取られ、金の要らない態のいい召使いとしてこき使われた。友もなく希望もない、リユーイはただ孤独に耐えた。

ある日、王が勇者を選ぶ儀が行うと宣言した。国は魔物に脅かされ、その魔物を生み続ける母体・魔王を倒す事の出来る聖剣に認められる者を探していた。聖剣に認められなければ聖剣は力を発揮しないからだ。そこでは騎士の1人レオンはファイサリスが最有力候補としてあがっていた。少年は儀に参加した。だれが痩せこけ、小汚い子供が聖剣に認められると予想していただろうか？だが、少年は聖剣に選ばれ、少年は勇者となった。

どんな人間であっても、聖剣に選ばれば勇者。非力なリユーイは戦えるように徹底的に訓練された。しかし、周囲の予想に反してリユーイはメキメキと頭角を現し、あっという間に強くなった。

そしてリユーイが青年になる頃、リユーイは魔王を倒す旅に出ることとなった。従者として騎士のレオンと魔術師のメイリンが選ばれた。リユーイはレオンが選ばれたと知って、とても喜んだ。レオンはリユーイの師であるとともに、背中を任せられる戦友であったからだ。

長い旅の中で、リユーイは沢山の仲間を得た。

そして、仲間の一人と恋に落ちた。彼女の名前はユリア。聖女とよばれ、魔物を滅する力を持つ、儂い美貌と強かな心を持つ美しい女性だった。

そして、様々な苦難を乗り切つて、リユーイは魔王に挑んだ。魔王は魔物を生み続ける、諸悪の根源。魔王を倒せば世界に平和が訪れると、リユーイは信じていた。仲間も勇者を手助けしたが、生まれ続ける魔物の相手をするのが精一杯だった。そして、魔王に止めをさせるのは聖剣をもつ勇者だけ。最終的には勇者と魔王の一騎打ち。骨が折れ、血が飛び、轟音が響いた。

そして、静寂が辺りを包み込んだ。

「リユーイ！」

今にも倒れそうなりユーイをレオンが駆け寄り支える。リユーイは長い間共に闘い、背中を預け合つたレオンを仲間の中でも一番信頼していた。

「皆、は？」

「無事だ。急に魔物が塵になつて消えた。…魔王を、倒したんだな」

「ああ…」

リユーイの体は一人では立ってられないほど衰弱していたが、心は喜びに満ち溢れていた。

「あのな…レオン。俺、ユリアにプロポーズするんだ。」

レオンが驚いたようにリユーイを見た。

「魔王を倒したら、ユリアに結婚しようって言おうつてずっと思ってたんだ。ユリアは、受け入れてくれるかな…？」

愛しい姿を思い浮かべると、頬が緩むのを感じた。

「…リユーイ」

「…な、ん…で、…？」

胸に刺さつた銀色の剣は、深く深く突き刺さっていく。

「ああ、きつとユリアは受け入れるだろうな。…なんで、お前なんだ。俺が聖剣に選ばれるはずだった。俺が勇者になるはずだった。

俺が、選ばれるはずだったんだ！なのにお前のせいで俺は選ばれな

かった！お前のせいだ！お前の栄光は、俺の物になるはずだった！全部、全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部だ！俺の全てを奪っておいで、お前はユリアまでも俺から奪うのか？

「！
」
ごぼりと口から血が溢れた。

違うと言ったはずの声は音にならず、ヒューヒューと耳障りな呼吸だけが繰り返される。

レオンはなにかに取り憑かれたかのように何度も剣を突き刺す。ゆるさない、と呪詛のように永遠と言い続ける。弱り切ったリュイには抵抗するすべがなかった。

悲しみと苦痛を感じ、薄れゆく意識の中、リュイは…

ある勇者の軌跡（後書き）

後味の悪い話を書きたくて書いた。

Q・あなたの背中には羽がついています。それはどんな羽ですか？

問題です

あなたの背中には羽がついています
それはどんな羽ですか？

「え、どんなんで…なにがあるかな」

天使の羽とか？

「えらい可愛らしいなあ」

定番どころで行くとその辺だね。

あとは鳥とか、変化球で蝶とかトンボとか？

「ん…で、その質問って何なん？」

心理テスト。

「へー、そんなんあるんだ」

うん、友達に教えてもらった。

「ほな、俺は鷹にするわ」

鷹かあ。

なんかアンタらしいかも。

「で、答えは？」

えーっとね。

それは『あなたが憧れているモノ』です。
ねえ、鷹つてどんなイメージ？

「あー…賢いかなあ。」

それに憧れてるって事。

「えー、俺の深層心理にはそんな欲求がっ！オーマイガッ！
…あ、じゃあお前の答えはなんなん？」

え、私の？

「そーやよ。俺だけってズルイヤん」

うーん…これっていうのはないんだよね。

だけど、大きくて強くて羽の一枚一枚が洗練されている、そんな
羽だと思っ…かなあ？

「…なんか、お前らしいなあ」

あはは、なにそれ

Q・あなたの背中には羽がついてます。それはどんな羽ですか？（後書き）

心理テストって本当に沢山ありますよね。一時期、周りで心理テストが流行った事があったけど、すぐに皆飽きてました。

大阪弁をちよつと練習してみた。私は祖父母宅が西の方にあるんですが、大阪弁とはちよつと違うんですね！。

空は青いですか？

私の両親の古くからの友人：巧おじちゃんは売れない小説家だ。

巧おじちゃんは自分の事に一切構わない、そのままにしておくこと、食事も睡眠もとるのを忘れて倒れてしまう。誰かに助けられないと生きていけないタイプの人間だ。

薄暗い部屋で、ほんのりと漂う畳の匂いとカリカリと巧おじちゃんが万年筆を動かす音。それに包まれながら巧おじちゃんが書いた話を読むのが好きでよく入り浸っていた。

おじちゃんの書く小説は、ファンタジーからSF、現代を舞台にした超能力物から学園物まで、本当にジャンルが広くて、同じファンタジーでも設定が違ったり世界観が違ったりして、本当に面白かった。

『ねえ、タクミおじちゃん』

『……………なんだ』

カリカリと硬質な音は止まらない。

『なんで、おじちゃんの書く小説の主人公は主人公ひーろーじゃないの？』

なんとなく呟いた言葉だった。

『おじちゃんの小説は、世界を救ったり悪と戦ったりするのは別の登場人物で、主人公はそれを見てたり、手助けしたりするだけじゃん。なんでヒーローを主人公にしないの？』

カリカリとずっと続いていた音が、止まった。

それはとても異常な事だった。おじちゃんはどんな時でも筆を進

めるのを止めない人で、止めた所なんて食事と睡眠以外見た事がなかった。

『おじちゃん？』

子供心に異様なものを感じ取って、おじちゃんを見た。

『……………俺は、小説を書くのが好きで小説を書いているわけじゃない』

いつもよりも長い沈黙の後、おじちゃんは口を開いた。

『これは、あいつらへの償いで弔いだ。』

そう言うと、またカリカリと音が鳴りだした。

音がいつも通りに戻った事に安心したけど、新たな疑問が残った。小さい私には分からない言葉ばかりだったけど、なんとなく概念は分かっていた。

どうして、書く事で償いになるの？

だって、おじちゃんの書く小説はほとんどがフィクションで、登場人物は架空の存在。

どうして、架空の存在に償わないとなんだろう…？

聞きたかった。だけど、おじちゃんの背中はまだもう聞けなと言っていて、その雰囲気は拒絶しているように見えて、聞けなかった。

そしてその一ヶ月後、未完成の作品を残しておじちゃんは消えた。

警察に捜索願も出して、散々探したけどおじちゃんは見つからなかった。家の物は何も無くなっていなくて、おじちゃんだけがいな

なくなった。なんの形跡も残さず、まるで最初からいなかったみたい
に。

そして15年。私は就職して県外に出る事になった。

私は時々ばかばかしい事を考える。

もしかしたら、おじちゃんが、小説の主人公なのではないかと。
世界を救うヒーローを、時に歯がゆく思いながらも傍観し、こっ
そりと手助けし、ヒロインと仲情ましくしているのを嬉しく思い、
望まないまま敵対する。

おじちゃんはたぶん、見殺した人々を、自らの手で葬った人々を
書く事で弔ってるんだ。

…あり得ないと思う。

最初は登場人物を誰かに当てはめてはめているのかもしれないと思っ
たけど、私の知るおじちゃんは人付き合いを全くしない人で、知り
合いがいるとは思えなかった。

そして、私はある仮説に行きついた。

”異世界””転生”…おじちゃんは、それを経験したのではない
かと。

あり得ない。馬鹿馬鹿しい。空想もほどほどにしろ。今も、そう
自分に言い聞かせる。

だけど、こう思ってしまう自分もいる。

おじちゃんが消えたのは、どこか別の世界に呼ばれたからじゃな
いのか…？

「…ありえないわ」

頭を振り、考えを頭から追い出す。

ふと、おじちゃんの事を考えていたからか、おじちゃんの書いた小説が懐かしくなって、本棚に手を伸ばした。おじちゃんの家はもう無いけど、おじちゃんの書いた小説は全部引き取った。

何回も読みなおして、クタクタになつた小説を開く。小説と言っても、原稿用紙を纏めただけの物だ。世に出されたものは一つもない。おじちゃんは売れない、売ろうとしない小説家だった。

角ばつた、荒々しい筆跡。一心不乱に書き続ける後ろ姿。浮世離れしたおじちゃんの雰囲気。ぶつきらぼうで無口、だけど必ず返事をくれる私の尊敬する人…今でも鮮明に思い出せる。

おじちゃん、今あなたはどこにいるのですか？ご飯はちゃんと食べてますか？ちゃんと睡眠をとってますか？今でも、書き続けているのですか？

空は、青いですか？どんな世界でも、空が青い事を願います。

おじちゃんがいなくなつてから、私は16回目の春を迎えようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1424ba/>

短編集

2012年1月9日23時47分発行